

# ヨダキーイズムをめぐって

## —大分方言ヨダキーの意味—

松田美香

### 1. 大分方言ヨダキー

大分方言のヨダキーは、「ヨダキーイズム」という造語が生まれるほどに大分方言話者が頻繁に使う語である。ヨダキーから〈めんどうくさい・おっくうだ〉の意味を探り当てるのは、他地域の人間にとって難しい。このような方言独特の語が多用されていると、外来の者にとっては耳に残るし、またその意味や用法を知りたくなるものである。本稿では、なぜヨダキーという語がこれまで頻繁に使われてきたのか、ヨダキーを多用するから大分人（おいたんし）は「めんどうくさがり屋」であるという俗説は果たして本当か否か、これらの疑問について考えてみたい。

手順としては、まずヨダキーの意味とその変遷を明らかにし、その上でヨダキーを頻繁に使う社会とはどのような社会なのかを考察することにする。

### 2. ヨダキーの意味とその変遷

#### 2-1. ヨダキーの用例

以下に大分方言の方言集その他から得られたヨダキーの用例を示す。カッコ内は引用文献から共通語訳を写したものである。ただし、ヨダキーの部分だけそのままにしてある。ひらがなとカタカナの書き分けは、出典に従う。

例文(1) 連休トモチ 喜んだら 宿題が オーケンコト 出タ。 ヨダキーの一  
(連休と思って喜んだら、宿題がたくさん出た。ヨダキーなあ)

例文(2) いいけんど、 千円は ちっと ヨダキーなあ (買い物の時)<sup>(1)</sup>  
(いいけど、千円はちょっとヨダキーなあ)

例文(3) よだきい仕事<sup>(2)</sup> (ヨダキー仕事)

例文(4) 「うん、どうしたんか」「あ、もういい」  
「なんか、喋るのがよだきいんか」「うん」「ほないいわい、喋らんでん」<sup>(3)</sup>  
(「ん、どうしたんだい」「あ、もういい」「なんだい、喋るのがヨダキーのか」「うん」「それならいいよ、喋らなくても」)

例文(5) あん おじい おいさんの ところへ 使いに ゆくのは よだきいなあ。  
(あの恐ろしいおじさんのところへ使いに行くのはヨダキーなあ)

例文(6) よだきい人(し)のじょうが 集まっち 何んを やらかす気 じゃろうか<sup>(4)</sup>  
(ヨダキー人ばかりが集まって何をしでかす気だろうか)

例文(7) 農家の子は 農家を 継いじ ほしい 当時の親の気持ち。切ない胸の内じ  
勉強がでくると ほんとは困る。しかたねー 子供も 本当は 勉強が よだきい

も あるき どっちも よかったんか 悲しい時代でん あった。<sup>(5)</sup>

(農家の子は農家を継いで欲しいというのが、当時の親の気持ち。切ない胸の中で、子が勉強ができると本当は困る。|それで勉強ができなくなるのも|仕方が無い。本当は子も勉強がヨダキューもあるから。だから勉強ができてできなくてもどっちでもよかったのか、そういうことを考えると、悲しい時代でもあった)

## 2-2. ヨダキーの文中での位置と語形について

A 名詞(句)+が／は ヨダキー…………… 例文(1), (2), (4), (5), (7)

B ヨダキー+名詞…………… 例文(3), (6)

ヨダキーの文中における位置はAとBの2つである。また、例文(7)のヨダキューという語形は、古語「よだけし」の連用形「よだけく」あるいは「よだけう」が音声変化を起こして、(／yodakeku／→)／yodakeu／→／yodakyuu／となったものと考えられるから、これらのヨダキーはすべて古語「よだけし」から変化した語形として支障ない。

## 2-3. ヨダキーの意味について

方言集にはヨダキーの意味が書かれている。それらを列挙してみると、<おっくうで気乗りがしない><おおげさな><めんどくさい><嫌な><したくない>である。名詞に前接する例文(3)と(6)を除く全ての用例にこれらの意味を順に当てはめてみると、他の意味はそれぞれ交換可能だが、<おおげさな>という意味だけはその他の意味とは交換不可能であることがわかる。

例文(1) <宿題がたくさん出た。おっくうで気乗りがしない／めんどくさい／嫌だ／したくない／なあ。>

?? <宿題がたくさん出た。おおげさだなあ。> |

例文(4) <あの恐ろしいおじさんのところへ使いに行くのは、おっくうで気乗りがしない／めんどくさい／嫌だ／したくない／なあ。>

?? <あの恐ろしいおじさんのところへ使いに行くのはおおげさだなあ。>

また、例文(2)は他とは反対に、<おおげさな>という意味だけが自然である。

例文(2) <千円は、ちょっとおおげさだなあ。>

?? <千円は、ちょっとおっくうで気乗りがしない／めんどくさい／嫌だ／したくない／なあ。>

例文(2)だけが、<おおげさな>の意味の方がしっくりくる。「千円(と)は、ちょっと<おおげさだ>なあ。」とすれば自然と<千円も出したくない>という意味までを含むように感じられるからである。

例文(3)と(6)の意味については、共通語訳として例文(3)<めんどくさい仕事>、例文(6)<やる気のない人>が与えられている。<おっくうで気乗りがしない・めんどくさい・嫌な・したくない>を仕事や人に対する一種の評価の意味として使用している。これらの作業から、ヨダキーの意味を2つに分けて考えるとよいことがわかる。

ヨダキーの意味1 <おっくうで気乗りがしない・めんどくさい・嫌な・したくない>  
= 例文(1), (3), (4), (5), (6), (7)のヨダキーの意味

ヨダキーの意味2 <おおげさな>+<おっくうで気乗りがしない・めんどくさい・嫌な・したくない>=例文(2)のヨダキーの意味

例文(2)のヨダキーは、意味1の前に<おおげさな>を付け加えなければならない点で分けるべきである。見ての通り、意味1と2は完全に別の意味ではなく、<おおげさな>の意味が必要か否かの違いである。このような場合、意味1と2の関係は意味の変遷に求めることができそうである。そこで、ヨダキーの語誌を調べてみた。古くは『源氏物語』に「よだけし」の例がある。

例文(8) うるはしかるべき折節は、所狭くよだけき儀式を尽くして、かたみに御覽ぜられたまひ、また、いにしへのただ人ざまに思し返りて、今宵は軽々しきやうに、ふとかく参りたまへば、いたう驚き、待ち喜びきこえたまふ。

(改まった公式の儀式の折には、仰々しく厳めしい威儀の限りを尽くして、お互いにご対面なさり、また一方で、昔の臣下時代に戻った気持ちで、今夜は手軽な恰好で、急にこのように参上なさったので、大変にお驚きになり、お喜び申し上げあそばす。)『源氏物語』鈴虫<sup>(6)</sup>

例文(9) おほやけに仕ふる人とてもなくて、こもり侍れば、よろづうひうひしうよだけくなりにて侍し

(我が家には宮中に出仕する人も無く屋敷の中にじっと籠もっているので、何事にも物馴れせず、宮中に上がるのがおおげさに思えておっくうになっております。)『源氏物語』行幸

例文(8)は<おおげさな>のみを、例文(9)は前述の意味2を代入すれば現代共通語として理解することができる。なお、意味1は複数の意味を並べているが、実際にはどれを代入しても意味が大きくは変わらないので、以降は<おっくうで気乗りがしない>で代表させることにする。

さて、このように既に平安時代にも2つの意味に分けて考えることができる「よだけし」であるが、先の意味1と2との関係から、意味の変化があったことがうかがえる。どのようなプロセスで意味の変化が起きたのかを説明する際には、認知意味論的な考え方を取り入れる必要がある。認知意味論の考え方は「意味を人間の外界認識の産物であると考え」、「語の意味は、認識された外界をカテゴリー化 categorization したものであると考え」<sup>(7)</sup>のもので、意味の変化あるいは拡張が起こる場合、「比喩」が密接に関係していると考えられる<sup>(8)</sup>。比喩表現は人間の認知能力に基づく活動であり、日常体験と関係が深い。方言の意味変化を考える場合、認知意味論は非常に有効に働く。ヨダキーの意味の変化には、メトニミーという比喩が関係していると考えられる。

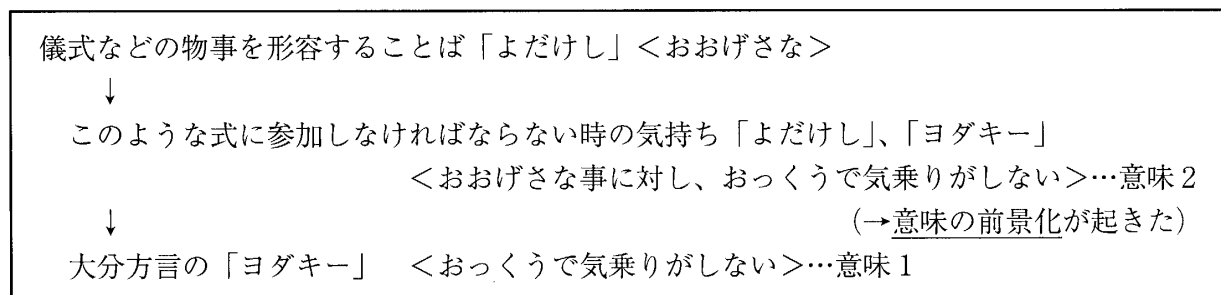
認知意味論におけるメトニミー（換喩）の考え方

ある対象を把握したり指示する際、その対象を直接把握するのに何らかの困難をとまなう場合に、別のより把握しやすいものあるいはすでによくわかっているものを参照点 reference point として活用し、本来把握したい対象を捉える。<sup>(9)</sup>

「よだけし」の場合、場所、儀式、行事などの様子を表す<おおげさな／ものものしい／仰々しい／厳かな>という意味領域から、それに対する話者の感情<おっくうで気乗りがしない>の意味領域への拡張が起こり、次第に<おっくうで気乗りがしない>という感情をもっぱら表すようにもなったと考えられる（図1）。

まず意味2は、意味の前景化が起きて新たな意味が成立しつつある状態と考えられる。意味の前景化とは、例えば英語の leave での、その意味<去る>から<～を後に残す>という含意が生まれ、その含意がひとつの意味となっていくことを言う<sup>(10)</sup>。私たちの日常経験で<おおげさな>事と表現するときにはもし、それに参加しなければならないとなれば、<おっくうで気乗りがしない> (含意) という感情を伴うことが多い。意味1は、その含意が次第にもうひとつの意味として成立するようになったものと考えられる。大分方言には「ギューラシー」という<おおげさな・仰々しい>の意味を表す語があり、この語との関係もあって意味1への移行が促された可能性がある。

図1 「よだけし」からヨダキーへの意味の変化・拡張



このような考え方を適用すると、例文(1)~(7)のヨダキーの意味も無理なく説明できる。一般的に外界の物事を表すことは、人間の内面を表すことより分かり易い。メトニミーは直接表現するのが困難な場合に、別のより把握しやすいものを活用する比喻であるから、<おっくうで気乗りがしない>というやや複雑な心境を、儀式などのおおげさ加減を形容する「よだけし」を利用して表すようになったと考えられるのである。

#### 2-4. 地域差について

もっとも意味の変化には地域差があり、また、このような意味を違う方言で表す地域もある。大分県内でも、西部の日田や北部の中津ではヨダキーをあまり使わないようだ。日田ではセレレン(することができない)、中津ではシャワシー(せわしい)などを使うようである。一方、宮崎県、鹿児島県、兵庫県ではヨダキーが使われている。宮崎ではヨダキゴロ(怠け者)、ヨダキボ(怠け者、無精者)ということばもあり、ヨダキーの意味は<困った・厄介な・いやだ・したくない>とある<sup>(11)</sup>。

### 3. なぜ、ヨダキーが多く聞かれるのか

次に、なぜヨダキーがよく使われるのか、多く聞かれるのかについて考えてみたい。ヨダキーの意味の成り立ちから考えてもわかる通り、ヨダキーにはヨダキーという感情が起こる対象が存在する。大分方言には類似の意味を持つダリー(ダイー)もあり、その意味は<肉体的に疲れていて、おっくうで気乗りがしない>というものである。ダリーは肉体的疲労を表すのが中心であり、その場合、<何もする気が起きない>という含意が引き出されるが、特に対象を必要とはしない。

ヨダキーの方はその前提として、「～するべきだ」という外部からのプレッシャー(圧力)が存在し、それに対して<おっくうで気乗りがしない>のである。述語として使う場合はプレッシ

ヤーに反抗するために、人を形容する場合は逆に話者が外部のプレッシャーとして使われる (図2)。

図2 ヨダキーには対象がある

<p>A 述語として使う場合…例文(5) 使いに ゆくのは よだきいなあ。 「<u>お使いに行くべきだ</u>」に対して</p> <p>B 人を形容する場合……例文(6) よだきい人(し)のじょうが 集まっち… 「<u>もっとやる気を出してしっかりするべきだ</u>」として</p>
---

このようにヨダキーとは、プレッシャーを掛ける「外部(他者・社会)」とそれに反抗しようとする「内部(個人)」のせめぎ合いに関係する言葉なのである。ところで、AとBのヨダキーを同一人が使うことは、「自分は怠けたい、でも他者は怠けるな」という態度を表す。これが「大分のヨダキーイズム」とされているものではないであろうか。しかし、本稿ではその答えを保留してもう少し考えてみたい。自ら「ヨダキー」と言って外部からのプレッシャーを押し返し、「ヨダキーヤツ」と言って人々(社会・世間)と価値観を一致させる作用をするのがヨダキーである。だとすれば、社会的な活動をする人間にとって必要な“ガス抜き”と“他者あるいは集団との同化”を促す効果がある故に、人々は好んでヨダキーを使うのではないだろうか。

図3 ヨダキーの意味の作用・効果

自分(内部)	「ヨダキー」	社会・世間(外部)
A <おっくうで気乗りがしない> …ストレス発散効果	→ 反抗 批判 ←	B <(〇〇は)やる気がない人だ> …他者・集団との同化効果

#### 4. ヨダキーをよく言う人はどんな人か ～まとめに代えて～

これまで分析してきたように、ヨダキーは「社会的人間」のやや複雑な感情を表しており、外部からの「～するべきだ」というプレッシャーが読み込まれている。このような語をたくさん使うのはどんな人であろうか。

- 1) 外部のプレッシャーなどに敏感な人…感じる事がなければ、反抗も批判も有り得ない。
- 2) 内面吐露の上手な人…プレッシャーを溜め込まない。
- 3) 場の雰囲気をよく感じることができる人…同じことを思っているときに、皆を代表してヨダキーを言うと、代わりに言ってくれて助かったと思われる。

ヨダキーをよく言う人は怠け者であるというのは、いささか短絡的過ぎるように思う。それよりは優れて社会的な人の方が多いのではないか。共同体の中では、人間は自分個人と外部社会との葛藤の中で生きている。自分を殺し過ぎることなく、時には仲間を代表してヨダキーと声を上

げ、ほっとさせることのできる人は、社会からのプレッシャーに目配りの利く社会的な人間である可能性が高い。したがって「ヨダキーイズム」を、人間性と社会性のバランスを取ることに有能な人々を代弁する言葉として、捉え直す必要があるのではないだろうか。

ところで、20代の大分の若者数名に尋ねたところ、ヨダキーシ／ヒト／ヤツという用法では使わないという答えが返って来た。自分の思いを表現するのは自由だが他者を批判することは抑圧されている、現代日本社会を反映していると考えれば、納得のいく現象である。

## 【付記】

本稿は、2005年9月3日に大分県立生涯教育センター「おおいた県民アカデミア大学」において、「ヨダキーイズムから見た県民性を考える」として発表したものを大幅に修正したものです。発表の機会を与えてくださった生涯教育センターの皆様、また有益なご意見をくださった聴講生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 注

- (1) 例文(1)(2) 高田一彦 著『大分方言』(1971年)
- (2) 蒲江町・町教育委員会編著『かまえことのは解体新書』蒲江町教育委員会(2000年)
- (3) 吉田寛 著『おばさん物語』おおいたインフォメーションハウス(株)(2000年)
- (4) 例文(5)(6) 大野秀臣 著『大分話し言葉用語用例辞典』(2004年)
- (5) 野津原方言調査会『野津原方言集後編附録「こぼればなし」』(1998年)
- (6) 渋谷栄一 著「渋谷源氏」<http://suzuka.cool.ne.jp/krpm/genji/sgenji38.html> を参考にした。その他に岩波書店『新日本古典文学大系19～23源氏物語』(1993)および同別巻2『源氏物語－索引』で調査を行った。
- (7) 松本曜 編著「認知意味論」5pp. 大修館書店(2003)
- (8) 主なものはメタファー(暗喩)、シネクドキー(提喩)、メトニミー(換喩)の3種とされている。
- (9) 前掲書「認知意味論」87p.-88p.
- (10) 前掲書「認知意味論」99p. Taylor, John R. 1989. 辻幸夫 訳『認知言語学のための14章』(1996)紀伊国屋書店の引用
- (11) 小林隆一 著「県民性&地域性」[http://www.geocities.jp/rk\\_staff/index.html](http://www.geocities.jp/rk_staff/index.html) による

## 【大分方言参考文献】

- 井上博文(1992)「大分県東国東郡姫島村方言に於ける方言性向語彙資料」『内海文化研究紀要』第21号  
大分県総務部総務課『大分県史方言篇』(1991)大分県  
徳川宗賢 監修(1998)『日本方言大辞典』(第8刷)小学館  
松田正義・日高貢一郎(1996)『大分方言30年の変容』明治書院  
松田正義(1978)『古方言書の追跡研究』明治書院  
拙稿(2004)「方言性向語彙から見た大分人～室山敏昭『「ヨコ」社会の構造と意味－方言性向語彙から見る－』を読んで～」別府大学地域社会研究センター『地域社会研究』第9号  
右田典哉(1994)『例解日田方言』  
松本 修(1996)『全国アホ・バカ分布考－はるかなる言葉の旅路－』新潮文庫(1993太田出版)  
室山敏昭(2000)『方言語彙論の方法』和泉書院  
(1998)『生活語彙の構造と地域文化－文化言語学序説－』和泉書院